

# 今年度大切にしたいキーワード

本研究計画作成試案では、小教研会員の誰もが内容を理解できるように、各部会でレイアウトや解説の方法を工夫しています。

また、学習や研究を進める上で大切にしたい事項を「キーワード」という形で提案しています。

日常の学習指導や研究推進において、十分に活用していただきますようお願いいたします。

## ◆◆◆ 国 語 科 ◆◆◆

### 主体的

「主体的」とは、子供が言葉に着目し、言葉を吟味し、意味や働きを捉え直しながら、進んで言語活動に取り組むことである。そのために次のことを大切にしていく。

- ・指導事項を分析し、子供の実態を踏まえて、育成したい資質・能力を明確にすること

### 対話的

「対話的」とは、教材や友達と関わりながら、意味の異同を自覚したり、互いの考えを共有したり、自己の内面に目を向けたりすることである。そのために次のことを大切にしていく。

- ・自分の考えをもつ場、友達と話し合う場、自分の学びを振り返る場を設けること

### 評価規準の設定

言語活動の中で「考えが深まる」子供の姿を具体的に想定し、指導事項に基づいて評価規準を設定する。その上で、単元のどの段階で、どの評価規準に基づいて、どのように評価するかを決定する。そのために次のことを大切にしていく。

- ・設定する言語活動を教師が事前に体験しておき、努力を要する状況等への手立てを想定すること

## ◆◆◆ 社 会 科 ◆◆◆

### 社会認識

子供は、対象とする社会的事象と向き合う中で、身に付けた様々な知識と潜在的な見方・考え方を関連付けたり、再構成したりしながら自らの捉え方や意味付け方を吟味し、自分の問題解決への道筋を考えていく。そして、問題解決に向けて、多様な捉え方や意味付け方に触れたり、その違いを話し合ったりすることで、子供は社会的事象に見え隠れする人々の働きや営み、自分の生活との関わりなどについて繰り返し考えたり、表現したりしていく。その過程で、比較、関連、総合させながら子供の内に深まる社会生活への理解やそれに伴って育まれる社会の一員としての態度である。

### 子供が社会的事象を身近に引き寄せる『問い』

『問い』とは、問題解決に向けた様々な学習の場において、社会的な見方・考え方を働かせたくなるような学習の状況や場面をつくり出すものである。また、学習問題はもとより、社会的事象に触れた子供の素朴な疑問や教師の発問（言葉がけ）等を幅広く含むものである。教師は、子供の実態や素材の教材化を踏まえながら、対象とする社会的事象と子供たちの生活経験とを関連付けることで、子供の興味・関心を高めたり、これまでの経験や知識と社会事象との矛盾点に気付かせたりする。そして、子供が自ら社会的事象との関わりに気付き、切実感をもって考える契機を生む『問い』を構成したり、『問い』を子供たちの中から引き出したりすることが大切である。

## ◆◆◆ 算 数 科 ◆◆◆

### 主体的

「主体的」とは、目的意識をもって数理的な事象に繰り返し働きかけ、自分の考えをつくり上げることである。そのために、今年度は次のことを大切にしていく。

- ・子供の問いを大切にしたい切実感のある学習課題

### 協働的

「協働的」とは、友達の考えの中に自分では気付かなかつた数学的なよさを見だし、新たな視点から自分の考えを再構築することである。そのために、次の3点を大切にしていく。

- ・子供の姿を想定した単元計画
- ・互いの考えを理解し、よさを感じ合う言語活動
- ・新たな視点から考えを見つめ直し、よりよい考えに再構築する場

このように、自分の考えをつくり上げ、新たな視点から再構築することを繰り返す中で、よりよい考えをつくり上げ、数学的に考えることのよさを感じ取る子供の育成を目指す。

## ◆◆◆ 理 科 ◆◆◆

### 主体的・対話的な探究

「主体的に探究」している子供は、自然の事物・現象に興味・関心をもち続けながら、自らの問題を見だし、見直しをもって問題解決していく。また、「対話的に探究」している子供は、人との対話、自然の事物・現象との対話、自分との対話を通して、自己の考えを広げ深めながら、問題を科学的に解決する。

### 粘り強さと自己調整の力

評価の観点「主体的に学習に取り組む態度」では、知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行う側面と、粘り強く取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面が求められている。粘り強さの側面からは解決方法を振り返り、それらを見直し、再検討を加えることも大切である。また、自己調整については、より妥当な考えをつくり出すために、他者と関わり、自分の考えや学習の進め方を振り返り、見直そうとする機会をつくるのが大切である。

## ◆◆◆ 音 楽 科 ◆◆◆

### 音楽と豊かに関わるための題材構成や教材選択の工夫

音楽の構造等を分析し、適宜、〔共通事項〕を要として各領域や分野の関連を図るなど、効果的な学習展開となるよう題材構成や教材選択を工夫する。また、学校や地域の実態に応じて題材構成を工夫し、学んだことや音楽活動と学校内外における様々な音楽活動とのつながりを意識できるようにする。

### 『音楽のよさ』を感じ取るための学習過程の工夫

音楽的な見方・考え方を働かせ、友達と協働しながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考える場を設けたり、音楽の構造を可視化したりする。また、音や音楽及び言葉によるコミュニケーションを図り、音楽科の特質に応じた言語活動を適切に位置付けられるように工夫する。

### 一人一人のよさや可能性が生きる評価の工夫

指導と評価の一体化を図り、「子供にどういった力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、指導の改善に生かしていくとともに、子供自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにする。

## ◆◆◆ 生活科・総合的な学習の時間 ◆◆◆

### 単元の見直しを子供と共有する

単元との出会いの場では、子供自身が「やってみよう」「できそうだ」「解決したい」という意欲をもち、これからの学習を見直し、いつも単元名に立ち返って取り組むことができるよう、単元との出会い方や単元名を工夫する。また、単元が進んでも、小単元や単元全体の見直しを共有し、子供たち自身が「今、何のために、この活動をしているのか」を意識できるようにし、子供の主体的な活動へとつなげる。

### 子供たちが自分との「違い」に気付くための共有の場面を大切にする

他の子供が相手の気持ちをより想像しながら聞けるように、問い返すだけでなく、場の再現や動画で確認するなど、発言している子供の意図が伝わるように工夫したい。このように、話し合いを進めると、子供は自分と比べて聞き、「違い」に気付く瞬間がある。その過程の異なる部分、思いや願い、学習の進め方、学んだこと等の違いに注目して聞くことができるようにしたい。これらの「違い」から、自らの取組を見直し、追究を充実させていき、一人一人の学びの核となる。

## ◆◆◆ 図画工作科 ◆◆◆

### ものや人と関わり、豊かに発想・構想する力を伸ばすために（思考力、判断力、表現力等）

活動全体のイメージをつかませ、発想を広げるために、題材提示の仕方を工夫する。また、材料や用具、場所等から発想を広げるために、それらとの出会いや触れ合う場を工夫する。

発想や構想の刺激となるような関わりが自然と生み出されるように、友達と関わる場の工夫を大切にしたい。また、〔共通事項〕の視点から、子供の気付きや表現の意図を整理する。

### 創造的につくり表したりする力を伸ばすために（技能）

その題材で、全ての子供が身に付ける技能と、子供自らが発見していく技能、この両者を明確に区分し、題材を構想する。

創造的に技能を発揮できる鑑賞活動、話し合いや学習環境づくりについて工夫する。

### 子供の見方や感じ方を広げ、深めるために（学びに向かう力、人間性等）

子供が自他の作品を鑑賞するなどして、よさや可能性、異なりに気付き、見方や感じ方を広げたり、深めたりできるよう評価方法を工夫する。

ワークシート等やICT機器を活用し、表現活動における適切な記録の累積を図り、指導や支援に生かす。

## ◆◆◆ 家庭科 ◆◆◆

### 指導の効果を高める題材構成

中学校の指導内容との系統性を確かめた上で題材のゴールを明示し、学校行事や他教科等と関連させた題材を構成する。また、習得した知識及び技能を活用できるよう、問題解決的な学習を段階的に取り入れる。その中で、学校での共通体験の場を工夫することで子供たちが願いをもち、自ら解決すべき課題を設定していくような題材構成を工夫する。

### 学びを深める手立て

子供たちが自らの考えを広げ深めるために、グループ学習の効果的な取り入れ方を吟味する。また、身に付けた知識及び技能を生活で生かす場面を設定し、自分の成長や実践する喜びを実感できるような学習過程を組むことが大切である。子供自身が考えたり、工夫したりしながら課題の解決に取り組む問題解決的な学習を充実させる。話合いの視点を明確に示し、意図的に考えの根拠を問い返したり全体に揺さぶりをかけたりするなどの教師の働きかけを行う。

### 主体的な学習を支える評価

題材の目標を明確にした上で評価規準を設定し、指導と評価の計画を作成する。評価による効果を見極め、ねらいに応じて評価の観点や方法を選択する。自己の成長を自覚できる評価カードの活用の仕方や、次の課題解決への意欲につなげる評価の工夫等、主体的な学習を支えるための評価方法や評価の場面を具体化する。

## ◆◆◆ 体育科 ◆◆◆

### 子供の思いや願いを想定し、習得・活用・探究の見通しがある授業づくり

子供がどのような思いや願いをもって運動に取り組もうとしているのかを捉え、運動の特性や系統性を踏まえ見通しをもった授業づくりをしていくことが大切である。その際、子供が動きをどのように習得・活用・探究していくかを想定することが重要となる。特に活用・探究の場面において動きの高まりや運動の楽しさを広げていこうとする姿が生まれ、深い学びが実現されると考える。

### 子供自らが体育の見方・考え方を働かせ、課題解決を図ることのできる学習過程

体育の見方・考え方を授業中の活動で表すと、「すること」…動きを試す・発表する、「見ること」…手本を見る・動きを見比べる、「支えること」…友達を補助する・アドバイスする・励ます、「知ること」…技の知識を得る・仲間の思いを知るなどである。このような活動を通して、課題解決を図っていく学習過程を大切にしていく。

### 子供が自分の変容や高まりを実感し、自ら次の活動に進んでいくことができる振り返り活動

子供の「先生、今日はこんなことに挑戦したい!」「チームでこんな練習をしたい!」という声で始まる授業にしたい。そのためにも、子供が、しっかりと自分自身の変容を実感したり、自己を見つめ直したりすることができる振り返り活動（「C：振り返り」→「A：改善」→「P：計画」）に重点を置きながら、PDCAサイクルの充実を図る。

## ◆◆◆ 道徳科 ◆◆◆

### 主題の分析

道徳科の授業をつくるには、「子供の実態把握」や「内容項目の解釈」「学習指導の構想」から成り立つ「主題の分析」を行うことが大切である。主題の分析を行うことによって、教師は、授業を通して願う一人一人の子供像を思いえがくことができ、授業のねらいを明確にもつことができる。

### 自己の生き方についての考えを深めるための教師の働きかけ

子供一人一人が道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める授業を目指すには、教師の明確な意図をもった働きかけ（ねらいに迫る発問や問い返し等）を工夫することが大切である。

### 指導と評価の一体化

道徳科では、学習状況を適切に評価することが求められている。評価の対象となる子供一人一人の学習状況は、教師の指導によって変わるものであり、教師の指導を充実させていくことが評価の充実につながり、評価を充実させていくことが指導の充実につながる。

## ◆◆ 外国語活動・外国語科 ◆◆

### 単元構成の工夫

バックワードデザインに基づき、ゴールの姿を明確にした単元構成をすることにより、子供たちは見通しと目的意識をもって活動に取り組む。また、新しく出会う語彙や表現に慣れ親しむ活動と、既習の語彙や表現を活用する活動を繰り返していく単元を仕組むことで自分の考えや気持ちをより豊かに伝え合うことができる。

### 言語活動の充実

単元の目標を踏まえて、実際に英語を使用し互いの考えや気持ちを伝え合う必然性のある場面を設定する。中学年では、子供が興味・関心をもつような題材を扱い、自分のことを話す場面を設定することで既習表現に慣れ親しんだり、表現がより適切になったりする。高学年では、自分のことに加え、相手や身の回りの物に関する事柄について伝え合う場面を設定することで、使う表現を選択・自己決定するために思考し、相手意識を育むことができる。また「読むこと」「書くこと」については、音声で十分慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を取り上げ、子供が過度の負担を感じることがないように留意する。

## ◆◆◆ 特別活動 ◆◆◆

### 人間関係形成 <築きたい人間関係>

「個と個」や「個と集団」の関わりの中で、互いのよさを生かし、協働して取り組み、よりよい人間関係を築こうとする視点。必要な資質・能力は、集団の中において、特別活動の学習過程全体を通して、個人と個人あるいは個人と集団という関係性の中で育まれると考えられる。違いを認め合い、みんなと共に生きていく力を育てる。

### 社会参画 <つくりたい社会>

児童が現在、そして将来に所属する様々な集団や社会に対して積極的に関わり、よりよいものにしていこうとする視点。必要な資質・能力は、自発的、自治的な活動を通して、個人が集団へ関与する中で育まれると考えられる。よりよい集団や社会をつくらうとする力を育てる。

### 自己実現 <なりたい自分>

将来を見通して、今の自分にできることを考え、よさや可能性を生かして実践しながら、よりよい自分づくりを目指す視点。必要な資質・能力は、自己の理解を深め、自己のよさや可能性を生かす力、自己の在り方や生き方を考え設計する力など、集団の中において、個々人が共通して当面する現在及び将来に関わる課題を考察する中で育まれると考えられる。なりたい自分に向けてがんばる力を育てる。

## ◆◆◆ 特別支援教育 ◆◆◆

### 主体的・対話的に取り組む

子供の実態を把握し、子供の「強み」を生かして単元や教材を工夫したり、自らが学習を進められるような場を設定したりすることで子供は見通しをもって主体的に取り組む、学びの楽しさを味わうようになる。また、子供が安心できる環境を整え、教材や自らの課題、教師や友達との関わり方を工夫し、感動や楽しさを味わうことができるように支援することで、様々な事象や自分と対話しながら粘り強く学習に取り組むことができると考える。

### 学びを自らのくらしに生かす

子供の個性や能力を的確に把握して、それを基に個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成し、それぞれの子供に合った支援を行う。さらに、学校生活での学びを子供のくらしに生かすことができるように、家庭や地域と連携していくことを大切にす。子供の教育的ニーズに基づいた計画的・継続的な支援の下、子供が身に付けた見方・考え方を働かせて日々「できた」を積み重ねることが生きる力となり、将来の自立的な社会参加を支えることにつながる。と考える。

## ◆◆◆ 保 健 ◆◆◆

### 組織的かつ計画的・継続的な保健教育

保健教育を効果的に進めるために、子供の発達の段階を考慮して、学校の教育活動全体を通じて適切に行う。また、体育科、家庭科及び特別活動はもとより、各教科、道徳科及び総合的な学習の時間等においてもそれぞれの特徴を踏まえつつ、相互に関連させながら組織的かつ計画的、継続的に行う。

### 健康に関する資質・能力の育成

「生きる力」を育むため、現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力として、健康に関する力が位置付けられた。身近な生活における健康に関する知識を身に付けることや、必要な情報を自ら収集し、適切な意思決定や行動選択を行う過程等を通して、生涯にわたって積極的に心身の健康を保持増進するための資質・能力の育成を目指す。

### 養護教諭の専門性を生かした効果的な取組

養護教諭が学級担任と連携し、集団指導において専門性を生かす役割を効果的に果たすことにより、その後の保健室での個に応じた指導に生かす。